

山の奥

僕の胸の中にはもう一人の僕がゐます
彼の胸の中にも なほ 別の僕がゐます
山の奥には 思はずも ひらけた場所があり
豊かに実った 枝もたわわな果樹の林があります
入り組んだ枝は競つてまろやかな黄色と赤の果実をつけ
しづかな黄金色の日の光を
それぞれの果実が射返すやうにはねてゐます
山裾まで 見事な模様をつくつてゐます
風が吹くと 金属性の音がひびきわたるのです
僕が山の奥の道をさらに行かうと思ひはじめた時
僕の胸の中のもう一人の僕も同じ思ひだつたのです
彼の胸の中にも別の僕もさう思つたのか
もうずっと先の道を行くのが見えます
しかも一人ではありません
無数の僕が いろいろの方面への道を行くのが見えます
誰が誰だかわからない たくさんの僕が現はれてゐるのです
強い日の光に むせかへるやうな熟れたにほひがします
別世界に飛ぶものと思つてゐた朱の冠をいただき全身は緑の鳥が
頭上を過ぎ 一直線に青空を行きます
音もなく 見得るかぎりの山が移動しはじめました
はるか彼方 瀧が珠をこぼすやうに輝いてゐます
僕が自分をたぐり寄せようとしても
無数の彼等は ある者は果樹の枝の鞆をゆらせ
ある者は衣服をすて 日向に四肢をのばして眠つてゐます
にこやかに目を細めて天を眺めてゐる者もゐます
どうしたものだらうと 僕はもう一人の僕と顔を見合はせませ
山の奥に かうした永遠の平安があるとしたならば
懶惰な自分について それはそれとして
僕は自分をなりゆきにまかせよう